

# 1940年代前半の保育雑誌における「母親教育」記事 — 『幼児の教育』誌の月刊「幼児の母」欄を中心に —

## Statements for Mothers Regarding Education in Magazine for Preschool Teachers in the Early 1940s: On the Series of Articles Entitled “Gekkan Youji-no Haha” in Monthly Magazine *Youji-no Kyoiku*

浅野俊和  
Toshikazu ASANO

抄録：本稿は、1940年代前半、保育雑誌『幼児の教育』に掲載され、抜き刷りも別途発行されていた月刊「幼児の母」欄に着目し、同欄の内容とそこに見られる「母親教育」の主張を整理・検討するものである。そこに見られた主張は、次の3つに集約される。すなわち、1) 園児や未就園児の家庭に幼稚園教育への理解を求め、その存在意義を強く訴えたこと、2) 「賢母」像をくり返し説き、幼稚園保姆を見習えと強調したこと、3) よい躰や心身の鍛練、栄養管理などの具体的方法を示し、幼児期における「錬成」の意義を説いたことである。それら3点に基づいて、同欄では、当時の政策要求に応え、保育界の模範にもなるような「母親教育」の論調が形づくられていたのだと言える。

キーワード：日本幼稚園協会、倉橋惣三、家庭教育、皇国民教育、総力戦体制

### はじめに

総力戦体制下における教育内容及び制度の刷新・振興を企図して、1937(昭和12)年12月に設置された教育審議会は、発足1年後である1938(昭和13)年12月に、「国民学校、師範学校及幼稚園ニ関スル件」を答申し、「幼稚園ニ関スル要綱」として幼児教育の改革方針を集約的に示している。同「要綱」は全4項からなるものであり、第4項には、「幼稚園ト家庭トノ関係ヲ一層緊密ナラシムル共ニ之ニ依リ家庭教育ノ改善ニ裨益セシメ、併セテ幼稚園ノ社会教育的機能ノ發揮ニカメシムルコト」という改革方針があげられた<sup>1)</sup>。この項目をあえて示した趣旨について、「要綱」が議案とされた審議会総会では、次のような説明がなされている<sup>2)</sup>。

一、幼稚園ハ……、家庭ヲ扶ケテ幼児ノ身心ノ適正ナル発達ヲ遂ゲシムルヲ以テ本旨トシ、特ニ社会的乃至教育的理由ニ依ツテ家庭ニ求メ得ザル発達ノ機会ヲ与フルニカメルコトガ大切デアリマス、此ノ意味ニ於テ一層家庭トノ聯絡ヲ密接ナラシムベキ方法施設ヲ講ズルコトガ肝要デアリマス、之ニ依ツテ畜ニ幼稚園ノ職能ヲ完ウシ得ルノミナラズ、延イテ家庭教育ノ改善ニ裨益シ、幼児保育ノ全キヲ期スルコトガ出来ルト思ヒマス

また、同審議会は、1941(昭和16)年6月、「社会教育ニ関スル件」も答申し、「家庭教育ニ関スル要綱」において家庭教育の方針・目的や振興のための具体的方策を掲げた。こちらは全5項からなり、第5項に、「母ノ会等ノ施設ノ整備ヲ図リ国民学校、幼稚園、託児所等ニ普及徹底セシムルコト」が掲げられている<sup>3)</sup>。その趣旨について、同じく議事録には、「第五項ハ母ノ会等ニ関スルコトデアリマシテ、母ノ会等ハ、従来多少ノ施設ヲ見テ居ルノデアリマスルガ、之ヲ広ク国民学校、中等学校、幼稚園、託児所等ニモ普及徹底セシメマス共ニ、其ノ施設ノ整備ヲ図リマシテ、以テ家庭教育ノ振興ニ寄与セシムルコトガ必要ト存ジマス」との説明がある<sup>4)</sup>。

このように、1940(昭和15)年頃には、戦時家庭教育振興政策が展開され、幼稚園・託児所や小学校(国民学校)の「母ノ会等」を中心に実践網の形成が進められており、もともと母親に向けた関わりがなされてきていた保育界でも、にわかに「母親教育」への対応が強く叫ばれることとなっていた。「皇紀二千六百年」に当たる1940年は、「八月以降新体制運動と共に隣組の活動や家庭婦人の職能が改めて考へられ、母性教育こそは保育問題解決の一であることが明らかにされた」こともあり、「文部省の家庭教育研究会や小学校の母の会、母姉会等による家庭教育振興策をはちめとして、保育施設に於てもその社会教育的機能の發揮が改めて要望され、母の会

活動が漸次意識的にとりあげられるやうになつた」のである<sup>5)</sup>。そして、その中でも、幼稚園関係者の対応は非常に活発なものであった。

例えば、1940年5月、「皇紀二千六百年記念祝典幼稚園大会」として、第8回全国幼稚園関係者大会が奈良市橿原神宮において開催され、「幼稚園ニ関スル要綱」の内容に関わる提案や建議案の決議がなされており<sup>6)</sup>、前述した第4項への対応も議論されている<sup>7)</sup>。具体的には、「教育審議会案幼稚園四項目の研究委員を挙げて、之が実施案を作製し、其筋に提出しては如何」との提案が、東京大和郷幼稚園から「協議題」に出されており、「委員を挙げて其調査を委嘱し、而して、其報告は『幼児の教育』誌上に於てすることに決定」され<sup>8)</sup>、翌1941年1月には、関係者によって文部省へと建議も提出されたのである<sup>9)</sup>。建議の全文は、決定通り保育雑誌『幼児の教育』（「日本幼稚園協会」編輯・発行）に掲載されており、「家庭教育」との関わりが取りあげられた第4項については、次のようにまとめられた<sup>10)</sup>。

◎現下ノ時勢ニ鑑ミ幼稚園教育振興策ヲ挙ゲ其筋ニ建議スルノ件

現行幼稚園令公布セラレテ実二十有五年、保育事業ノ発展著シキモノアルハ洵ニ慶賀スル所ナリ、然レドモ時勢ノ進運ニ伴ヒ尚改革刷新ヲ要スル点尠カラズ、茲ニ幼稚園ニ関スル教育審議会案ニ対シ、討議研究シテ具体的項目ヲ挙ゲ其ノ筋ニ要望セントス。

〔中略〕

四、幼稚園ト家庭トノ関係ヲ一層緊密ナラシムルト共ニ之ニヨリ家庭教育ノ改善ニ裨益セシメ併セテ幼稚園ノ社会教育的機能ノ發揮ニ努メシムルコトイ、母姉会其ノ他諸会合家庭訪問又ハ文書等ニヨリ互ニ連絡ヲ図リ幼児教育ノ効果ヲ大ナラシムルコト

ロ、家庭ヲ善導シテ其ノ日常生活ヲ合理的ナラシメ皇民生活ノ強化ニ努メシムルコト

ハ、時代ニ即応シテ母親ノ自覚ヲ促シ幼児教育ノ重要性ヲ知ラシメ保育ニ対スル認識ヲ深カラシムルコト 以上

ところで、その『幼児の教育』誌では、これまで述べてきたような社会的状況下にあつて、1940年1月号（第40巻第1号）より月刊「幼児の母」欄を新設し、1943（昭和18）年10月号（第43巻第10号）までの毎号に欠かさず掲載する形で、「母親教育」の支援・展開を組織的に図っていた。同時期に発行されていた保育雑誌『保育』や育児雑誌『愛育』でも「母のページ」などの枠を設け、「母

親教育」に力を入れてはいる。しかし、『幼児の教育』誌の場合、綴じ込み附録のような形で載せられていた月刊「幼児の母」欄は、別注で抜き刷りの頒布を行い、幼稚園児や未就園児の母親に配る“月刊新聞”としても使用させるなど、他誌には見られない独自の誌面づくりが見られた。

「日本幼稚園協会」は、『幼児の教育』誌に月刊「幼児の母」欄を設けることで、何を行おうとしたのか。そして、同欄には、どのような記事が載せられ、どういった主張がなされていたのか。以下、本稿では、それらの視点に基づき、月刊「幼児の母」欄の内容に関する整理・検討を試みてみたい。なお、『幼児の教育』誌については、掲載された保育実践記録の分析・検討が数多くの先行研究でなされてきた。しかし、管見による限り、月刊「幼児の母」欄を単独で取りあげることはなされていない。ただし、総力戦体制下の保育施設における「母親教育」をめぐるのは、「恩賜財団愛育会」や「保育問題研究会」に関する研究が蓄積されている<sup>11)</sup>。その意味において、本稿の試みは、それらに対し、同時期の「日本幼稚園協会」による取り組みの一端を示すものとなる。

## I. 月刊「幼児の母」欄とは何か

月刊「幼児の母」欄を掲載していた雑誌『幼児の教育』は、わが国の保育界を代表する月刊誌の1つであり、1901（明治34）年1月に『婦人と子ども』誌として創刊された<sup>12)</sup>。誌名は、その後、1919（大正8）年1月に『幼児教育』（第19巻第1号）と、1923（大正12）年9月には『幼児の教育』（第23巻第9号）と変更されており、関東大震災（1923年9月1日発生）の影響やアジア・太平洋戦争（大東亜戦争）末期から占領初期までの混乱などによる長期休刊が挟まりはしたものの、同誌は現在まで刊行され続けている。編輯・発行は、1896（明治29）年4月に東京女子高等師範学校附属幼稚園内で結成された「フレーベル会」が一時期の例外を除いてほぼ行っており、1918（大正7）年10月に同会が「日本幼稚園協会」と改称して以降も、1946（昭和21）年10月の復刊時にフレーベル館へ業務委託するまで、そうした立場は基本的に変わらなかった。

そのような『幼児の教育』誌に月刊「幼児の母」欄が設けられたのは、前述したように、1940年1月号でのことである。同号には、東京女高師附属幼稚園主事（園長）及び協会主幹で、同誌の編輯兼発行者も務めていた倉橋惣三が、「月刊『幼児の母』の計画に就て——御賛同と御利用を乞ふ」と題する案内文を寄せており、そこには月刊「幼児の母」欄を新設する理由も述べられていた。その全文は、次のようなものである<sup>13)</sup>。

月刊「幼児の母」の計画に就て  
— 御賛同と御利用を乞ふ —

日本幼稚園協会 倉橋惣三

「幼児の教育」に「幼児の母」といふ一種変つたページのあらはれたことは既にお気づき下さつたと思ひますが、これから毎号つゞけてゆきます。

幼稚園が幼児への直接の保育を任務とすると共に、母の教育者、家庭教育の指導機関としての使命をもつべきものであることは、予て繰り返しかへし本会の主張し来れること、又、皆さまの強く御自覚になつてゐるところであります。そのためにはいろいろの方法もあり、現に皆さまも、いろいろとお力を注いでおられること、信じます。月刊「幼児の母」は、その小さき一助ともなり度く、皆さまに活用して頂き度くて、生れ出たものです。

一応は「幼児の教育」の頁内に掲載しますが、これを御覧下さつて、皆さまの御園の保護者に頒つ御趣旨を以て本会へ注文いたゞきたいのです。すると、本会はその御注文の部数通り抜刷りにして、実費を以てお送りします。それは可愛らしい四頁の母の新聞といった独立の形になつて、お手許へ参ります。そして、お手許から母達の手へ渡るのであります。世には、母のための読みものもいろいろありますが、幼児の母といふ特定の意味をもつものとして、更に、それが、我子の幼稚園から配られるのですから、母の特別の注意をひくことを疑ひません。その上、立読みしてもすぐ読み切れる四頁です。忙しいお母さん方にも親しみ迎へて貰へるでせうと思ひます。

実は、こういふものがほしいが、園々で小部数印刷するのも手数であるといふお話を、予て方々から聞きます。此の計画は、つまり、そういふ方々のための御便利をはかるものと申してもよろしいのですが、本会としては、更に、一園でも多くに御すゝめして、之れによつて、我国の全家庭に、幼児教育の促進と刷新とを図りたいと、熱望し切願して居る次第であります。小さい仕事ですが、お力をおあはせ下さい。

#### ○月刊「幼児の母」頒布規定

- 一、毎月の注文切を十日とします。(一月は十五日)
- 二、部数、送り先きを明記して、代金と共に御註文下さい。尚「幼児の母」代金なる事を必ず御附記下さい。振替にて御送金の方は本会着迄に比較的多くの日数を要しますから御急ぎの時は為替(マツ)の方便利です。
- 三、十五日に発送します。(一月は二十日)
- 四、御註文は十部を一単位として、実費を左の通り

申受けます。

- 十部 金式拾銭
- 送料 十部まで三銭  
二十部以上送料不要

○十部以下の端数はおことわりします。

五、本計画の趣旨に全幅の御賛同を下さつて、一ヶ年分を予約御註文の場合は、事務上最も好都合であります。実はなるべく、そういふ御予約を多く得たいのでありまして、途中からでしたら、本年十二月までの計算でお申込み下さつて結構です。

六、毎号は、号数を附せず、月順にだけして置きますから、どの月の分から御利用下さつても、又、或る月だけの御利用でも、端号といふやうな形にはなりません。但し、毎号つゞけて利用して下さるこそ望ましいことで、そういふ方々のために、毎号に整理保存のための綴り孔をつけておきます。

七、更に甚だ立入つたことの方ですが、御利用の仕組について念のため附記して置きます。即ち一寸気をつきますだけでも、(イ)幼稚園が保護者に無料配布する場合。(ロ)実費を保護者の銘々の負担とする場合。(ハ)幼稚園内保護者会或は母の会等が費用を負担する場合。などそれぞれ御便宜次第であり得ませう。

「幼児の母」の第一の主旨は、現に幼稚園にある幼児の家庭教育に貢献したいのでありますが、或は之れを以て、幼稚園外の家庭に広く働きかけて、幼児期教育の主要性を宣布し、ひいては、幼稚園の正しき意味での宣伝にも用ゐられ得ると考へます。たとへば、二月、三月号は、幼稚園の理解をすゝめる意味を中心として編輯したいと思つてゐますが、それは、現に幼稚園保護者である家庭にも必要であると共に、入園期の幼児を有する家庭に向つて、広く配布(ママ)したいところのものでもありませう。

尚ほ「幼児の母」の御註文は東京市小石川区大塚町、東京女子高等師範学校附属幼稚園内、日本幼稚園協会へ。

「幼稚園が幼児への直接の保育を任務とすると共に、母の教育者、家庭教育の指導機関としての使命をもつべきものであること」を踏まえ、後者の任務を各幼稚園で推進していくため、その「小さき一助」としての活用を期待して、月刊「幼児の母」欄を雑誌内にあえて設けたのだという<sup>14)</sup>。また、『「幼児の母」の第一の主旨は、現に幼稚園にある幼児の家庭教育に貢献したいのでありますが、或は之れを以て、幼稚園外の家庭に広く働きかけて、幼児期教育の主要性を宣布し、ひいては、幼稚園の正しき意味での宣伝にも用ゐられ得ると考へます」といった一文が示しているように、「本会〔日本幼稚園協会〕としては、更に、一園でも多くに御すゝめして、

これによつて、我国の全家庭に、幼児教育の促進と刷新とを図りたい」との企ても、そこにはあった<sup>15)</sup>。なお、その後、倉橋による案内文「月刊『幼児の母』の計画に就て」は5ヵ月間掲載が続き、翌1941年1月からは無署名の「月刊『幼児の母』に就て」という1ページの案内が再び載せられている。

一方、月刊「幼児の母」欄は、綴じ込み付録的な位置づけであったため、本誌『幼児の教育』の夏季合併号に伴う8月号の定例休刊は見られるものの(1940年だけは例外的に2号分を同時発行しているので休刊がない)、1943年10月号まで欠かさず掲載された。その期間は3年10ヵ月に及び、全43号が利用に供されたこととなる。抜き刷りの発行部数について、正確な数値はわからない。しかし、同欄の掲載開始1年後となる1941年1月の案内文「月刊『幼児の母』に就て」には、「毎号甚だ不出来ですが、それでも広く各地幼稚園の御賛同を得て、月々と、保護者へ配つて下さる方が多くなりました」し、「あんな小さいものですが、従つて内容も簡単至極のものですが、毎月一万数千のお母さんに読んで貰へると思ふと、大によろこんでゐます」とあり、「毎月一万数千」の読者を得たという数値が以後もくり返されていく点などから、かなりの数を頒布していたことが窺い知れる<sup>16)</sup>。そのように読者が獲得できた要因としては、1929(昭和4)年から戦時下にかけて文部省社会教育官を兼任し、各地での講演を精力的に行うなど、保育界だけでなく、家庭教育振興政策の推進役でもあった倉橋惣三の影響力が大きかったということであろう。

しかし、そうした月刊「幼児の母」欄も、前述の通り1943年10月に廃止の時を迎える。同月号には、次のような「廃刊の御挨拶」が掲載されている<sup>17)</sup>。

#### 廃刊の御挨拶

「幼児の母」は、戦下物資尊重の必要上から、本号を以て廃刊いたします。甚だ遺憾でもありますが、御諒承願ひます。

「幼児の母」は昭和十五年一月発刊以来、まだ大して年を重ねて居りませんが、月と共に全国各地幼稚園の御利用と、各園保護者の方々の御愛読とによつて、発刊部数は、号を追ふて増加、実は御註文に応じきれない有様です。しかも、その増加と用紙尊重の必要とは、益々相容れないこととなります。廃刊の已むを得ざる次第であります。

幼児教育は愈々重要になります。その家庭の任務は益々重大になります。この小片子も、その発刊の初めの志を以て、愈々益々お役に立ちたいのです。併し、用紙の節減が弾丸になるといふことは、廃刊を悲しませるよりも勇ましくします。一切が勝ち抜くためです。

昭和十八年十月

日本幼稚園協会

大量の抜き刷りを発行することは、もはや戦時物資統制による用紙節約の状況から困難となった。それが、月刊「幼児の母」欄の掲載と抜き刷りの発行を取りやめた理由であるという。ただし、同欄がなくなったとはいえ、本誌『幼児の教育』の方は、その後も1年2ヵ月間にわたって発行されていくこととなる。

## II. 月刊「幼児の母」欄の内容

### (1) 第1面／巻頭言

月刊「幼児の母」欄は毎号4ページ(全4面)からなり、それは全43号を通して変わりがない。そうしたコンパクトさは、前掲した案内文「月刊『幼児の母』の計画に就て」でも触れられていたように、「可愛らしい四頁の母の新聞といつた独立の形」で抜き刷りの発行もしやすく、「立読みしてもすぐ読み切れる四頁」であることから「忙しいお母さん方にも親しみ迎へて貰へる」はずだとの意図によるものであった<sup>18)</sup>。

その誌面(紙面)は各ページが縦書き3段組みのレイアウトであり、全体の構成は大きく3つに区分されている。1つめは第1面であり、「幼児の母」という標題が掲げられ、発行年月が示されている他(時局の動向に合わせ、本誌『幼児の教育』の目次などと同様に「祝 皇紀二千六百年」や「大東亜戦争必勝完遂」といったスローガンも掲げられている)、上2段分を使って「巻頭言」のような文章が、下1段には幼稚園生活をめぐる「歳時記」とでもいうべき短文が掲載された。2つめは第2面と第3面であり、数号の例外が見られるものの、大半のものが2ページ通して上2段分のスペースに「講話・講座」を、同じく下1段に「栄養・料理記事」や「保姆の手記」などを配している。3つめは第4面であり、各号で3段組みの使い方が異なることに加え、掲載されている記事も「健康・衛生」や「児童文化・読書案内」などとテーマが多岐にわたっており、一時期行われた「健康・衛生」記事の通年連載を例外とすれば、そのページの使われ方に決まった形は見られない。それでは、各号の状況について、順番に見ていこう。

まず、第1面の「巻頭言」のような文章(以下、煩雑となるため、「巻頭言」と表記する)である。これは、倉橋惣三「わが子の通園——幼稚園保護者心得帖」が3ページにわたって載せられた1940年4月号(第40巻第4号)を除く各号で掲載されており、月刊「幼児の母」欄の“顔”というべきものであった。その中で執筆者名が明らかなのは4編(「日本幼稚園協会」主幹の倉橋惣三が3編、同会長の下村壽一が1編)であり、それも月刊「幼児の母」欄が『幼児の教育』誌で掲載されはじめた頃の1940年3月までに集中している(4ヵ月開いて同年8月号で倉橋名義のものが例外的に載った)<sup>19)</sup>。同欄が登場したばかりの4ヵ月間は誌面(紙面)の構成もまだ定まっておらず、後面に配された講話・講座の執筆担

当事者として倉橋が定着もしていなかった。そのような事情から、誌面（紙面）のどこかには必ず倉橋の名が出るような編輯もなされていたのであろう。なお、同欄の性格や文意から見て、無署名の巻頭言であっても彼の筆によるものを含んでいる可能性はかなり高いと言える。しかし、署名が見られないものについては、以下、「日本幼稚園協会」名義の文章と同等に取り扱い、同会による主張だととらえる。

巻頭言では、毎号、様々な話題を取りあげ、母親としての意識や役割を喚起させる形で、「賢母」の育成に努めている。内容的には、アジア・太平洋戦争の問題を除けば、年次ごとでの変化は見られず、基本的に1年間の生活の流れを追う中身となっていた。ただし、そこでの主張については、テーマ上の複合が見られはするものの、ほぼ、次のような3つの立場に分けることができる。

第1は、幼稚園教育の意義を積極的に説くものである。これは、園行事に絡めて述べられる場合が多く、とりわけ卒園式と入園式で年度替わりを迎える3月号や4月号においては、毎年必ず主張されるものとなっている。その立場は、前述したように、各幼稚園で月刊「幼児の母」欄の抜き刷りを配ることで、「之れを以て、幼稚園外の家庭に広く働きかけて、幼児期教育の主要性を宣布し、ひいては、幼稚園の正しき意味での宣伝にも用ゐられ得ると考へます」との意図を反映するものであった<sup>20)</sup>。

例えば、1940年3月号に「幼稚園の必要」を寄稿している下村壽一は、「家庭教育を補ふのが幼稚園であつて、幼児のため最も必要なものであ」とし、「幼稚園の必要は、国家の教育制度の上に於て強く認められてゐること」だと述べている<sup>21)</sup>。そして、次のように、国家的意義も強く主張する。

「今や此の重大な時局下にあつて、次代の国民たる幼児の保育は、国家のため一日も怠つてはなりません。私は、皆さんの大切なお子さんが、家庭と幼稚園との協力によつて、強き健康に、良き躰に、立派な国民となる基礎を、しっかりと得られることを祈つて已みません。」<sup>22)</sup>

また、無署名の論稿でも、入園に際して、「幼稚園の価値が如何に強く論じられ、又理屈の上でよく理解せられたにしても、……熱心な親心なしには、一人の子ども、幼稚園へは来させられないのです」と述べられ、家庭と幼稚園による連携・協力が説かれている<sup>23)</sup>。さらに、そうした入園の意義を「親心」から説く立場は、1941年12月8日のアジア・太平洋戦争への突入後、次のような強い主張に彩られることとなる。

「真に日本人らしい日本人になつて下さいよ。国のお役に立つ国民になつて下さいよ。陛下に忠義を尽くす国民になつて下さいよ。——これこそ、日本の母が、我子を入園させる心です。」<sup>24)</sup>

「我子を心身完全に育て上げることは、親として

先づ第一の報国です。その報国を、上が上にも完うせんが為に、それぞれの幼稚園を選んでの入園です。今日の入園の意義、まことに深いことです。」<sup>25)</sup>

第2は、幼児期における家庭教育の意義を説くものである。これは、先ほどの幼稚園教育を強調した立場と異なり、夏休みや年末年始などで家庭教育の占める割合が高くなる時期を中心に掲載されている。その話題は様々であるけれども、幼児の発育を支える母の賢さや務めが基盤に据えられている点での共通性は見られる。

例えば、倉橋惣三は、月刊「幼児の母」欄がはじめて掲載された1940年1月号の巻頭言「大切な我子の幼児期」で、「お子さん方は、……大切な初め、すなはち幼児期にゐられるのです」と述べ、「ほんとうに、今の幼児期こそ、あなたのお子さんの一生のため一番大切な時です」と、親の心構えを説く<sup>26)</sup>。また、同年8月号で、倉橋は、「九月の子ども達こそ、夏の、夏を一ぱいに注意したお母さん方の傑作展覧会です」とも訴え、夏休み中における母親の貢献を労う<sup>27)</sup>。

しかし、その論調も、次第に時局を反映するものとなり、臨戦下の「切迫は国としてのことであり、その緊張は国民としてのことですからけれども、その実際が、子どもの日常にひしひしと感じられるのは家庭です」とし、「常よりも健かに成育して、常よりも大切な国の将来を担つて貰はなければならぬ彼等」だと述べるようになっていく<sup>28)</sup>。そして、アジア・太平洋戦争下には、戦争中心の家庭生活が乳幼児の生育を好転させていると指摘し、「戦時家庭の緊張が、勤労が、その根本である報国精神が、どの位大きな教育力を、我が子の上に及ぼしてゐるであらうかは、いふまでもないことです」と主張するに至る<sup>29)</sup>。

第3は、時局の要請に応える母親としての心得や態度を説いたものである。これは、同欄の誌面（紙面）構成がほぼ固められた1940年5月号の巻頭言「時局下の母」で、次のような主張がなされたことにはじまる。

「時局下の母には、常の母よりも二つの責任が付け加へられてゐます。／一つは、この時局下の非常生活の中で、しかも我子の成育に少しの支障もないやうに、一段の留意をしなければならぬことです。〔中略〕／更にもう一つの重い責任、時局を貫く国家的の大精神を、我子に徹底させることです。〔中略〕／……此の二つとも、母自らの時局認識によつてのみ出来得ることです。」<sup>30)</sup>

すなわち、「我子の指導は時局の認識を離れては出来ません」し、「政治家や教育家に必要な如く、時局認識は母に最も必要です」というのである<sup>31)</sup>。そうした立場から、以後、「新体制」を支える母としての務めや「紀元二千六百年家庭奉祝」及び「大詔奉戴」の意義が説かれる一方<sup>32)</sup>、「母の健康」や「母の勤労」、「母の大東亜知識」、「母の時間」、「母の服装」といった家事などの側面からも心得や態度が主張されていくことになる<sup>33)</sup>。そ

して、その訴えは、いつしか「賢母」の域を超えて、「完く生むこと、強く育てること、勇ましく献げること、これこそ戦時下の母の三大任務です」と、「母のみに出来る忠誠」を謳うものへと至ってしまう<sup>34)</sup>。

## (2) 第1面／歳時記

前述したように、第1面で巻頭言の下(3段組みの下1段)には、幼稚園生活をめぐる「歳時記」とでもいうべき短文(以下、「歳時記」と表記する)が掲載されている。巻頭言とほぼ同様に、月刊「幼児の母」欄が設けられたばかりの3ヵ月間は執筆者名があり(ただし、1940年3月号は「母の友」という筆名である)、その後は無署名となる。また、題名も各号で異なり、枠としてのスタンスもまだ形づくられてはいない。

1940年4月号からは、「母のこよみ」という枠名がつけられ(同年12月号では「立ちばなし」と例外的に改題されている)、幼稚園などに関わる季節の話題をタイトルとして示す形で体裁が整えられた(ただし、同年7月号は「母の読みもの——新聞」が同枠に収められ、「母のこよみ」は第4面に移動しており、11月号では建国祭本部「紀元二千六百年家庭奉祝要項」を同枠に掲げたことから休載となっている)。そして、翌1941年1月号以降は、「幼稚園から」の枠名だけとなり、月刊「幼児の母」欄が姿を消す前月の1943年8・9月号まで連載される。なお、最終号では、この枠が日本幼稚園協会「廃刊の御挨拶」(前掲)として使用されたため、第2・3面の下1段に通常の2倍の長さを持つ「この頃の朝夕に」(無署名)が載せられている。

歳時記の内容は、「幼稚園から」の枠名が表すように、園生活の移り変わりや保姆の関わりを母親に伝え、それを家庭教育の見本にさせるような内容となっており、そうした基本姿勢で一貫していた。また、その口調も、同じ1面にある巻頭言の語勢とは異なり、まさに幼稚園の保姆が語るような穏やかさを基盤としたものである。

しかし、そうした基調も、アジア・太平洋戦争へと突入して以降は、幼稚園生活自体が戦時色に彩られていったことにより、次第に戦時生活を踏まえた内容へと変わっていった。保育室に「大東亜戦争地図」を掲げて、それを保育教材としたことが話題に取りあげられ、同様の試みを家庭にも求めたり<sup>35)</sup>、「お国はいよいよ大きい戦争と大きい建設とで忙しいことです」けれど、「幼稚園はその中でも、子どもを楽しませることを忘れませんが、ものは戦時下らしく質実に、儉約に、しつかりと戦時下らしい生活をさせませう」と、節約の躰を訴えたりしているのである<sup>36)</sup>。

## (3) 第2面と第3面／講話・講座

次に、第2面と第3面の2ページに置かれた「講話・講座」枠である。これは、月刊「幼児の母」欄が掲載されるようになって2号めとなる1940年2月号から、その

枠が設けられるようになった。当初は枠名なしではじまり、「母の講座」や「教育講話」、「教育問答」と名称の変化が見られる。同年8月の夏休み特別号における内山憲尚「〔童話〕お魚と眼鏡」への差し替えを唯一の例外として、最終号までほぼ休みなく載せられていること、誌面(紙面)構成上で全体の中央部分に配置され、最もスペースを割いていることからすれば、この枠は月刊「幼児の母」欄の「メイン記事」と見なすべきものであろう。

その執筆者については、無署名のものがなく、初回の和田實を除けば、残りすべてが倉橋惣三となる。まさに、倉橋による誌上(紙上)連続講義であった。和田による1号分も含めて、講話・講座枠で講じられたテーマは、4年弱の掲載期間において、1年ごとで一括りにすることができる。年次ごとに、その変化を整理しよう。

1年めとなる1940年は、幼稚園教育への理解がテーマであったと見なされる。これは、前述したように、各幼稚園が月刊「幼児の母」の抜き刷りを園児以外の家庭にも配ることで、幼児教育の意義を知らしめ、幼稚園の必要性について広く認知させようとの意図を踏まえたものであった。具体的には、和田實「幼稚園は——何んな教育をするか」(同年2月号)を皮切りとして、倉橋惣三「幼稚園問答——幼稚園の教育的ねうち」(3月号)、同「わが子の通園——幼稚園保護者心得帖」(4月号)と、幼稚園教育の全体像を説くものがしばらく続く。そして、その後、倉橋「幼稚園でしてゐること——遊びの間にする指導」(同年5月号)という形で保育内容の紹介に入り、同「幼稚園でしてゐること(二)——手技いろいろ」(6月号)、同「幼稚園でしてゐること(三)——観察いろいろ」(9月号)、同「幼稚園でしてゐること(四)——おはなし」(10月号)、同「幼稚園でしてゐること——遊戯」(11月号)、同「幼稚園でしてゐること(五)——唱歌」(12月号)と、いわゆる「保育五項目」が1つずつ説明された(傍点原文、以下同様)。また、倉橋「夏休みが来る——家庭としての注意」(7月号)として、夏休み中の家庭における心構えを講ずることも忘れてはいない。

2年めに当たる1941年は、倉橋惣三「〔特別講話〕夏休み中の注意」(同年7月号)を除いて、枠名が「母の講座」と設定され、「わが子を良い子に」というテーマで全10回の連載が行われた。それらは、前年と異なり、家庭教育において母親がなすべきことを説く内容となっている。倉橋は、しばしば保姆の保育方法をよき躰の例としてあげ、そこから賢く学ぶようにも促した。ちなみに、彼が取りあげた「良い子」の要件とは、各号の題名が示しているように、「一生懸命になれる子」(1月号)と「真実な子 正直な子」(2月号)、「快活明朗な子」(3月号)、「人といつしよに楽しめる子」(4月号)、「人の好意をすなほに受取れる子」(6月号)、「敬ひ貴む心のある子」(9月号)、「興味の偏しない子」(10月号)、「も

のを仕舞ひまでする子」(11月号)、「てきぱきしてる子」(12月号)であり、その裏返しとなるのが「小さい利己主義者」(5月号)であるという。

3年めの1942(昭和17)年は、倉橋「夏の幼児の家庭生活」(同年7月号)という恒例の記事を挟んで、上半期の枠名が「教育講話」に、下半期が「母の講座」に改められての連載であった。そのテーマについては、全般的に見れば、前年12月におけるアジア・太平洋戦争のはじまりを受け、いわゆる「国民教育(皇国民教育)」の話題が取りあげられている。上半期の「教育講話」では、まず、「日本国民たることの喜び」を「国民感情」として涵養すべきこと(同年1月号)、今回の戦争が持つ意義を幼児にも教えられるべきこと(2月号)、「個人主義」ではなく「国中心の教育」が理念となるべきこと(3月号)と、戦争目的に適う幼児教育のあり方が説かれた。しかし、以後3ヵ月間は、新入園児を迎えたこともあり、「幼稚園の楽しさ」(4月号)や「保育といふこと」(5月号)、「ともだちどうし」(6月号)というように、あえて、話題も1年めの1940年に講じられた内容へと戻されている。一方、下半期の「母の講座」では、「戦時家庭教育心得——文部省指示要項解説」と題して4回にわたる連載がなされた。これは、1942年5月7日付の文部次官通牒「戦時家庭教育指導ニ関スル件」(発社128号)に伴って発表された「戦時家庭教育指導要項」の趣旨を踏まえ、「我国の家庭の特別なところ」(8・9月号、10月号)と「健全な家風」(11月号)、「母自身に」(12月号)という3つの観点から、戦時家庭教育の本義を述べたものである<sup>37)</sup>。

4年めの1943年は、「教育問答」という枠名がつけられ、その時々話題を「問答体」の文章で解説していくものとなった(同年10月号では、枠名が「教育講話」とされているものの、文章は「問答体」のままであるため、誤記だと考えられる)。そこで取りあげられた話題は、「時局を幼児にどう教へませう」(1月号)にはじまり、「気を強くするには」(2月号)や「国民学校への入学に就て」(3月号)、「幼稚園と母」(4月号)、「我子の性質」(5月号)、「清明心といふこと——日本人の心のもちまへ」(6月号)、「幼児の時局認識——この夏の家庭の心得の第一」(7月号)、「がまんづよい子」(8・9月号)、「幼稚園と家庭」(10月号)と多岐にわたり、一定のテーマに基づく連載とはなっていない。また、その多くは、倉橋惣三が講話・講座枠で説いてきた話題や過去の掲載記事と内容的な重複も見られる。そうした意味では、「問答体」による解説という文章表現上の工夫を除けば、それまでとの大きな違いを見ることはできない。

#### (4) 第2面と第3面／栄養・料理記事及び保姆の手記

第2面と第3面の2ページには、下1段の枠を使って「栄養・料理記事」や「保姆の手記」なども置かれている。月刊「幼児の母」欄が設けられるようになった1940年1

月号から1942年12月号までの3年間は、この枠を栄養・料理記事が占めており、4年目については、文部省推薦図書に関する紹介記事や母親の短文で穴を埋めながら、主として保姆の手記が載せられていった。

栄養・料理記事は、「何月の御馳走」や「何月の献立」、「手製栄養お八つ」、「栄養本位子供向きお菜」などと枠名の変化が見られるものの、幼児向けのお菜やおやつ作り方を紹介している点での変化はない。ただし、ここでは、季節や栄養補給に相応しい料理という基本的立場を守りながらも、社会状況の変化に伴って、限られた食材の有効活用を求める声に応えた内容としていくなど、戦時体制からの影響は見られる。

また、この枠については、執筆者の変化がなく、佐々木理喜子が一貫して担当をしている。佐々木の所属は、連載開始当初に「栄養研究所」であったものが、2年めの1941年1月号からは「厚生科学研究所国民栄養部」に、連載最終回の1942年12月号では「厚生省研究所栄養部」へと変わった。いずれの研究所も同一機関(現在の独立行政法人国立健康・栄養研究所)であって、1940年12月4日及び1942年11月1日の勅令によって他機関と合併して名称変更をしたものである。それらは人口及び国民の保健に関わる調査研究や技術者養成を担った国立研究教育機関であり、厚生科学研究所国民栄養部の国民栄養部研究会は、特定非営利活動法人日本栄養改善学会の設立にもつながった組織だとされる。

一方、保姆の手記に関しては、他面に載せられている場合もあり、この枠を必ずしも使用しているわけではない。しかし、執筆者名が記された保姆の手記は、3年にわたる栄養・料理記事の連載が終了して以降、枠に余裕を得たことで、誌面(紙面)全体から見れば、その掲載数を確実に増やした。それら手記の内容は、前述した第1面の歳時記と同じく園生活に基づくものではあるけれど、家庭教育に対する指導的な側面が強められている。

#### (5) 第4面／その他の育児関連記事

続く第4面については、1942年1月号から12月号にかけて健康・衛生記事が通年連載されたことを除けば、そのページで定まった使われ方を見ることはできない。しかし、内容的には育児関連の記事が大半を占めており、そうした意味での全体的なまとまりはあったとも言える。年次にしたがって、状況を追っていこう。

1940年は、記事の掲載形式そのものが安定していない。まだ誌面(紙面)の全体構成が定まっていなかった1月号から4月号にかけては、3段組みの内2段を研究者や専門家の短い講話に割り、残り1段を2月号から「文部省推薦幼児絵本」などの読書案内記事として利用している。寄せられた講話は、広瀬興「かぜを引かせぬ用心——冬の衛生」(1月号)とくらはし〔倉橋惣三〕「絵本に気をつけませう——母の大きな任務」(2月号)、堀七蔵「小学校新入学の用意」(3月号)、森脇要「簡単テ

スト」(4月号)である。5月号から12月号にかけては、8月号を除いて、第2面からの講話・講座枠が3ページの割り当てとなっているため、第4面独自の記事はなく、下1段の読書案内記事(あるいは枠を移動して掲載された歳時記)だけが、それ以前と共通している。前述したように、講話・講座枠の担当者は倉橋惣三であり、「幼稚園でしてゐること」の連載などがなされていた。なお、夏休み増刊号となった8月号では、内山憲尚「〔童話〕お魚と眼鏡」が第2面から第4面までの3ページすべてを費やす形で掲載されている。

1941年には、ページが全面使用となり、単発と2つの短い連載を交え、無署名の育児記事を掲載する枠として定着する。1月号は東京市厚生局児童課内東京市児童保護協会選「児童健康いろはかるた」を掲載したものの、翌2月号と3月号では「国民学校と家庭(全2回)」を連載している。その後、「入園初めの一ト月」(4月号)及び「我子の比較観察」(5月号)、「おもちゃ大学Ⅰ」(6月号)という育児記事が並び、「夏月号」と題された7月号では、倉橋惣三の特別講話「夏休み中の注意」が第2面から第4面まで載せられたために独自の記事を割り当ててはいない。8月号の休刊を挟んで、「おもちゃ大学Ⅱ」の掲載は行われず、「隣組幼稚園」(9月号)及び「遠足幼稚園」(10月号)、「日なた幼稚園」(11月号)、「炉辺幼稚園」(12月)という形で、家庭や地域での子育てを「幼稚園」に準えた内容の記事が連載されていく。

1942年は、前述の通り、1年間にわたって、齋藤文雄の執筆による健康・衛生記事が載せられている。その内容は、夏休みで定例休刊となった8月号を除いて、各月の衛生に関する知識や心得を説くものであった。なお、齋藤は、恩賜財団愛育会愛育研究所の保健部部長を務める小児科医(医学博士)であり、連載開始のきっかけについては、同会の理事でもある「倉橋先生の御命令で暫らく皆さんのお仲間入りをさせて戴き、職域奉公をいたす事になりました」と記している<sup>38)</sup>。

1943年には、齋藤の連載も終わり、以前のような記事の内容構成へと戻された。その記事の多くは保姆によって書かれたもので、菊池ふじの「躰方の試み」(1月号)にはじまり、及川ふみ「日曜日の子供」(2月号)及び一保姆「入園当時の睡眠について」(4月号)、山村きよ「お気をつけ下さい、お家の内でのお話を」(5月号)、徳久智江子「感じたまゝに」(6月号)、堤リユウ「夏季に於ける幼児の遊びと衛生」(7月号)、一保姆「家庭で幼児に聴かせるおはなしについて」(10月号)と続く。しかし、取りあげられた話題に関しては、園芸室「玄米食と野菜」(3月号)や宇留野勝正「初秋に於ける幼児の保健衛生」(9月号)といった保姆以外の者による記事も含め、健康や躰に特化したものが多く、齋藤による連載の後を担った部分も窺える。

## おわりに

以上、本稿では、保育雑誌『幼児の教育』に綴じ込んで載せられ、“月刊新聞”として別途発行もされていた月刊「幼児の母」欄に着目し、その掲載意図と誌面(紙面)の状況をたどってみた。最後に、それらの成果について、3つの観点から整理を行い、同欄における「母親教育」の主張が持っていた意味を検討してみたい。

第1に、園児や未就園児の家庭に幼稚園教育への理解を求め、その存在意義を強く主張していた点についてである。これは、倉橋惣三による案内文「月刊『幼児の母』の計画に就て」や「月刊『幼児の母』頒布規定」が示していたように、同欄の掲載と抜き刷りの頒布を行う目的に基づくものであり、主として第1面の巻頭言や歳時記でくり返し主張され、初期の頃には第2面と第3面の講話・講座でも説かれていた。

月刊「幼児の母」欄が『幼児の教育』誌に掲載されるようになった1940年当時には、施設数2,079園、園児数191,635人、5歳児就園率8.8%と、幼稚園の国民的普及は未だしの状況にあったとされ、そうした数値は小学校のような状況に到底及んでいない<sup>39)</sup>。幼稚園関係者にとってみれば、その普及と振興は念願でもあった。

しかし、別刷りも発行された月刊「幼児の母」欄による展開は、単なる“広報紙”にとどまるものではなかったと言える。それは、本稿の冒頭で引用した「現下ノ時勢ニ鑑ミ幼稚園教育振興策ヲ挙ゲ其筋ニ建議スルノ件」の文言にしたがえば、まさに、母親たちへと「幼児教育ノ重要性ヲ知ラシメ」るため(第4項のハ)、「文書等ニヨリ互ニ連絡ヲ図リ幼児教育ノ効果ヲ大ナラシムルコト」(第4項のイ)を担うべき発行物であった。月刊「幼児の母」欄という手軽な媒体を通して、幼い子供を持つ家庭と幼稚園の結びつきを形成し、園側から家庭教育の本義を注入していく。他誌には見られない抜き刷りの頒布は、そうした企図を全国隅々まで徹底させ得る有効な手立てだったと考えられる。幼稚園関係者に範を示すべき団体の「日本幼稚園協会」が取った方策とは、そのような“メディア戦略”と見なされるものであった。

第2に、家庭教育の担い手としての「賢母」像がくり返し説かれ、そのモデルに幼稚園保姆が据えられていた点をめぐってである。この点に関しても、第1面の巻頭言や歳時記で言及される一方、第2面と第3面の講話・講座において具体的な態度などが示されていた。そこでは、保姆と連携・協力する姿勢で、母親には家庭教育を担って欲しいとくり返し訴えられており、幼稚園と家庭の教育は一体のものだとの立場が強調されている。

以前から、倉橋惣三は、「幼稚園及び小学校、中学校、高等女学校等が、その家庭の教育機能を正当に要求し、誘導し、促進するの態度に於て充分の工夫を講ずるの必要ある」と説き、「学校教育を主としての家庭教育の責

務を強要するのではなく、学校が家庭と分け前するところの親心に発動して、家庭教育のために家庭教育を充実するのでなければならぬ」と述べていた<sup>40)</sup>。「誘導保育」論を展開する倉橋は、それを家庭教育にも適用し、幼稚園による「誘導」で家庭教育機能を「充実」させることこそが重要だとの立場から、月刊「幼児の母」欄の編輯や執筆に携わっていたのである。また、彼は、「家庭教育の補導は理でなく、論でなく、教へでなく、真情から真情への作用が中心となつてゐるものだから」こそ、「幼稚園の保姆先生ほど、母へ、しみじみとした家庭教育補導の出来る人はないといへる」と主張し、保姆が果たすべき模範的役割の意味についても説いていた<sup>41)</sup>。

宍戸健夫は、そうした倉橋の「母親教育」論が持つ規範的性格について、「彼は幼稚園や保育所での教育の重要性を力説しながら、けっきょく、『家庭が幼児教育の本質的場所』としたことであきらかなように、幼稚園令での第一条『幼稚園ハ幼児ヲ保育シテ其ノ心身ヲ健全ニ発達セシメ善良ナル性情ヲ涵養シ家庭教育ヲ補フヲ以テ目的トス』という立場を支持するもの」だったと指摘する<sup>42)</sup>。それは、先の「現下ノ時勢ニ鑑ミ幼稚園教育振興策ヲ挙ゲ其筋ニ建議スルノ件」における第4項の口「家庭ヲ善導シテ其ノ日常生活ヲ合理的ナラシメ皇民生活ノ強化ニ努メシムルコト」を推進するという立場でもあろう。総力戦体制下、幼稚園や保姆による「皇国民教育」と連携・協力し、それに倣った家庭教育を進めよという訴えは、母親を戦時体制に組み込む方向づけとなる。その主張は、小学校（国民学校）の「母の会」を通して戦時家庭教育振興の実施網が張り巡らされていく動きなども連動し、月刊「幼児の母」欄の読者である都市中間層の若き主婦たちを啓発・動員するものとなったのである。創始の段階から教育的役割が「良妻賢母主義」思想で彩られてきた幼稚園だとはいえ、家庭教育振興を指導する文部省社会教育官の職にあった倉橋主導のもと、両者はにわかに一体感を強めさせられた。その梃子として彼の企画・編輯・執筆で保姆・母親に示された共通のテキストこそが、『幼児の教育』誌の月刊「幼児の母」欄であったと見なされよう。

第3に、よい躰や心身の鍛練、栄養管理などの具体的方法を説き、時局への対応を求める形で、家庭養育の充実指導をめざしていた点に関してである。月刊「幼児の母」欄では、各枠を使って、家庭教育を担う母親としての修養に加え、「健民厚生」に必要な知識や技術、時局の推移を解説する記事もくり返し載せられていた。とりわけ、幼児の性格面に関する躰の仕方や日常生活・長期休暇中での心身鍛練法などは、第1面の巻頭言・歳時記や第2面及び第3面の講話・講座、第4面の記事で何度も取りあげられており、それが誌面（紙面）の重要な柱にもなっている。また、佐々木理喜子の栄養・料理記事や齋藤文雄執筆による健康・衛生記事が連載されるなど、健やかな身体の育成には力も入れられていた。

そうした各記事の内容は、前掲の「現下ノ時勢ニ鑑ミ幼稚園教育振興策ヲ挙ゲ其筋ニ建議スルノ件」で示された方針に当てはめれば、第4項のハ「時代ニ即応シテ母親ノ自覚ヲ促シ……保育ニ対スル認識ヲ深カラシムルコト」を具現化したものとなろう。また、それら記事の中でも、とりわけ躰や保健の話題が重視された背景には、「幼稚園ニ関スル要綱」の第2項「幼児ノ保育ニ付テハ特ニ其ノ保健並ニ躰ヲ重視シテ之ガ刷新ヲ図ルコト」を受け、「保健並ニ躰」が幼児版「錬成」の実践項目として位置づけられていた園の実状を踏まえ、家庭における躰などとの協調を図る目的があったからである<sup>43)</sup>。当時は、戦争遂行と「人的資源」の保護育成に向けて、国民の健康増進や体力向上、国民生活安定は欠かせないとする「健民健兵」政策が進められており、家庭・学校・社会の各教育では「皇国民錬成」の推進が課題となっていた。「我子を心身完全に育て上げることは、親として先づ第一の報国です」ととらえ<sup>44)</sup>、「国に捧げる為に我子を強く良くすると共に、子どもに、国への御奉公の心をしつかり養はなければなりません」とする主張は、まさに、そうした時局の要請に応え、幼児版「錬成」の展開を図ろうとしたことの表れだったとも言える<sup>45)</sup>。

一方、時局への理解と対応を促す記事については、「母の大東亜知識」が求められる社会状況にありながら、「それが不十分だったら、今日の日本のお母さんとして足りません」し<sup>46)</sup>、そうした話題を幼児へと伝えることについて、「幼稚園では、先生がその役目を受けもつて、いつもよく気をつけてゐるのですから、家庭でもよく気をつけていたゞきたいものです」とされた<sup>47)</sup>。講演・講習のような単発性のものでなく、「月刊」で抜き刷りを発行する形態を積極的に生かして、「時代ニ即応」した母親の啓培を企図し、それを誌面（紙面）に反映させたことは、同欄が有した機動力によるものであろう。

以上のような形で、抜き刷りを使って、園児や未就園児の家庭に幼稚園教育への理解を求め、その必要性を強調した上で、「賢母」のモデルが幼稚園保姆だと説き、園と家庭の連携・協力で「保健並ニ躰」を幼児版「錬成」として推し進めていく。それが、倉橋惣三による主導のもと、保育雑誌『幼児の教育』における月刊「幼児の母」欄の掲載を通して、「日本幼稚園協会」が展開した「母親教育」の内実であったと考えられよう。

#### 〔注〕

- 1) 『教育審議会総会会議録』第五輯, p.12 (『近代日本教育資料叢書 資料篇三 教育審議会総会会議録』宣文堂書店出版部, 1971年)。
- 2) 同上, p.30.
- 3) 『教育審議会総会会議録』第八輯, p.9 (『近代日本教育資料叢書 資料篇三 教育審議会総会会議録』(前掲))。
- 4) 同上, pp.25-26.

- 5) 浦辺史「保育界の一年を顧みて」(『保育問題研究』保育問題研究会, 第4巻第11号, 1940年12月, p.2).
- 6) [無署名]「第八回全国幼稚園関係者大会報告」(『幼児の教育』日本幼稚園協会, 第40巻第7号, 1940年7月).
- 7) その議事の具体的流れについては, 山下俊郎「第八回全国幼稚園関係者大会傍聴記」(『保育問題研究』第4巻第5号, 1940年6月)を参照のこと.
- 8) [無署名]「第八回全国幼稚園関係者大会報告」(前掲, p.59).
- 9) [無署名]「第八回全国幼稚園関係者大会委員建議」(『幼児の教育』第41巻第2号, 1941年2月, p.39).
- 10) 同上, pp.39-40.
- 11) 拙稿「1940年代前半保育運動における『母親指導』戸越保育所を中心に」(『名古屋大学教育学部紀要(教育学科)』第41巻第1号, 1994年9月, 第41巻第2号, 1995年3月), 吉長真子「昭和戦前期における出産の変容と『母性の教化』恩賜財団愛育会による愛育村事業を中心に」(『東京大学大学院教育学研究科紀要』第37巻, 1997年)や拙稿「戦前保育運動における『母親指導』——東京帝国大学セツルメント託児部と戸越保育所の実践を中心に」(『兵庫女子短期大学研究集録』第31号, 1998年), 拙稿「戦時期保育施設における子育て協力——戸越保育所での『連絡帖』実践を中心に」(『教育目標・評価学会紀要』第8号, 1998年), 西脇二葉「愛育会における地域子育て支援事業の展開——愛育隣保館(1938-45年)の母親教育事業を中心に」(『日本社会教育学会紀要』第37号, 2001年), 同「戦時下愛育会における保育事業の展開」(『上智大学教育学論集』第36号, 2001年), 河合隆平・高橋智「恩賜財団愛育会の母子愛育事業と困難児問題——総力戦体制下の母子保健衛生の近代化と『皇国民』の保護育成」(『学校教育学研究論集』東京学芸大学, 第7号, 2003年3月), 吉長「1930年代における農村の産育への関心と施策——恩賜財団愛育会の事業から」(『研究室紀要』東京大学大学院教育学研究科教育学研究室, 第29号, 2003年), 吉長「恩賜財団愛育会による愛育村事業の創設と展開——1930年代の農山漁村における妊産婦・乳幼児保護運動」(『研究室紀要』第32号, 2006年), 吉長「農村における産育の『問題化』——1930年代の愛育事業と習俗の攻防」(川越修・友部謙一編『生命というリスク——20世紀社会の再生産戦略』法政大学出版局, 2008年), 拙稿「戦時下保育運動における『母親教育』問題研究——『保育問題研究会』を中心に」(『中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要』第11号, 2010年)など.
- 12) 保育雑誌『幼児の教育』の歩みについては, 津守真「解題」(幼児の教育復刻刊行会編『復刻 幼児の教育(別巻)』名著刊行会, 1979年)などを参照のこと.
- 13) 倉橋惣三「月刊『幼児の母』の計画に就て——御賛同と御利用を乞ふ」(『幼児の教育』第40巻第1号, 1940年1月, pp.42-43).
- 14) 同上, p.42.
- 15) 同上, pp.42-43 ([……]内は引用者).
- 16) [無署名]「月刊『幼児の母』に就て」(『幼児の教育』第41巻第1号, 1941年1月, p.51).
- 17) [無署名]「廃刊の御挨拶」(『幼児の教育』第43巻第10号, 1943年10月, p.29).
- 18) 倉橋「月刊『幼児の母』の計画に就て」(前掲, p.42).
- 19) 倉橋惣三「大切な我子の幼児期」(『幼児の教育』第40巻第1号), 同「わが子の幸福」(同前, 第40巻第2号, 1940年2月), 下村壽一「幼稚園の必要」(同前, 第40巻第3号, 1940年3月), 倉橋「日やけ潮やけ」(同前, 第40巻第8・9号, 1940年9月). なお, 「月刊『幼児の母』頒布規定」において, 「毎号は, 号数を附せず, 月順にだけして置きます」と定められていた関係などから, 同欄からの引用に際しては, 巻号数やページ数を表記しづらいところがある(倉橋「月刊『幼児の母』の計画に就て」(前掲, p.43)). そのため, 本稿においては, 抜き刷りの状態ではなく, 本誌『幼児の教育』に掲載されたもの(復刻版)を史料として用いたこともあり, 便宜上, 同誌の巻号数や発行年月, ページ数のみを示す形を取る.
- 20) 倉橋「月刊『幼児の母』の計画に就て」(前掲, p.43).
- 21) 下村「幼稚園の必要」(前掲, p.37).
- 22) 同上.
- 23) [無署名]「入園と親心」(『幼児の教育』第41巻第4号, 1941年4月, p.53).
- 24) [無署名]「我子を入園させる心——国民的祈願」(『幼児の教育』第42巻第4号, 1942年4月, p.49).
- 25) [無署名]「大東亜戦下の入園」(『幼児の教育』第43巻第4号, 1943年4月, p.37).
- 26) 倉橋「大切な我子の幼児期」(前掲, p.44).
- 27) 倉橋「日やけ潮やけ」(前掲, p.56).
- 28) [無署名]「臨戦家庭の幼児」(『幼児の教育』第41巻第10号, 1941年10月, p.25).
- 29) [無署名]「戦時家庭の教育力」(『幼児の教育』第43巻第2号, 1943年2月, p.35).
- 30) [無署名]「時局下の母」(『幼児の教育』第40巻第5号, 1940年5月, p.47).
- 31) [無署名]「母の時局認識」(『幼児の教育』第40巻第7号, p.54).
- 32) [無署名]「新体制」(『幼児の教育』第40巻第10号, 1940年10月), [無署名]「紀元二千六百年」(同前, 第40巻第11号, 1940年11月), [無署名]「新体制の母」(同前, 第41巻第2号), [無署名]「家庭に於ける大詔奉戴」(同前, 第42巻第2号, 1942年2月).
- 33) [無署名]「母の健康」(『幼児の教育』第40巻第6号, 1940年6月), [無署名]「母の勤労」(同前, 第40巻第8・9号, 1940年9月), [無署名]「母は皆働く」(同前,

- 第41巻第11号, 1941年11月), [無署名]「母の大東亜知識」(同前, 第42巻第5号, 1942年5月), [無署名]「幼稚園と母の時間」(同前, 第43巻第5号, 1943年5月), [無署名]「母の服装」(同前, 第43巻第6号, 1943年6月).
- 34) [無署名]「戦時下の母の三大任務」(『幼児の教育』第43巻第10号, p.29).
- 35) [無署名]「幼稚園から」(『幼児の教育』第42巻第5号, 1942年5月).
- 36) [無署名]「幼稚園から」(『幼児の教育』第42巻第8・9号, 1942年9月(傍点原文)).
- 37) 文部次官通牒「戦時家庭教育指導ニ関スル件」及び「戦時家庭教育指導要項」は, 近代日本教育制度史料編纂会編『近代日本教育制度史料(第7巻)』(講談社, 1964年, pp.513-517)に全文が収録されている. なお, 同「要項」が持つ歴史的特質については, 奥村典子『動員される母親たち — 戦時下における家庭教育振興政策』(六花出版, 2014年)の第Ⅱ部第3章「戦時下家庭教育振興政策の展開」などを参照のこと.
- 38) 齋藤文雄「一月の衛生」(『幼児の教育』第42巻第1号, 1942年1月, p.56).
- 39) 文部省編『幼稚園教育百年史』ひかりのくに, 1979年, pp.820-821.
- 40) 倉橋惣三「家庭教育」(『岩波講座 教育科学(第10冊)』岩波書店, 1932年, p.22).
- 41) 倉橋惣三「幼稚園の家庭教育補導」(『幼児の教育』第40巻第2号, p.2).
- 42) 穴戸健夫『日本の幼児保育 — 昭和保育思想史(上)』青木書店, 1988年, p.14.
- 43) 『教育審議会総会会議録』第五輯, p.12(前掲).
- 44) [無署名]「大東亜戦下の入園」(前掲, p.37).
- 45) [無署名]「新体制の母」(前掲, p.49).
- 46) [無署名]「母の大東亜知識」(『幼児の教育』第42巻第5号, 1942年5月, p.51).
- 47) 倉橋惣三「〔教育問答〕 幼児の時局認識 — この夏の家庭の心得の第一」(『幼児の教育』第43巻第7号, 1943年7月, p.29).

※ 本稿は, 「平成26年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金(基盤研究(C)))」(タイトル: 「総力戦体制下の保育雑誌に見る『国民保育』論の生成と展開 — 『国民保育』誌を中心に」, 課題番号: 26381105)による研究成果の一部である.

Statements for Mothers Regarding Education in Magazine  
for Preschool Teachers in the Early 1940s:  
On the Series of Articles Entitled “Gekkan Youji-no Haha”  
in Monthly Magazine *Youji-no Kyoiku*

Toshikazu ASANO

**Abstract** : The present study examines statements directed toward mothers regarding education in a series of articles entitled “Gekkan Youji-no Haha” in the monthly magazine *Youji-no Kyoiku* published in the early 1940s. The statements can be summarized according to the following three points. First, the articles prompted mothers to deepen their understanding of kindergarten education as something children need. Second, writers expected mothers to cooperate with preschool teachers and follow their good examples. Third, to encourage their support of emperor-centered education for young children, the columnists lectured mothers on mental and physical health, sound upbringing, and nutritional management. On these grounds, the articles promoted domestic policies and kindergarten models by taking the lead in educating mothers.

**Keywords** : Nihon youchien-kyoukai, Souzou Kurahashi, Home education, Emperor-centered education, All-out war